

キハダ

(黄檗、黄膚、黄柏)

学名：*Phellodendron amurense*

ミカン科キハダ属



落葉性の高木で、幹の直径が1メートルをこすものもあり、秩父の森に多く自生しています。ミカン科の特徴で葉はカラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハが好みます、果実は直径10mmほどでミカン科特有の強い芳香があります。

樹皮は淡黄灰色で、コルク層がよく発達し、内皮は鮮やかな黄色です。黄色い内皮をもつため、キハダ（黄蘗）と呼ばれます。キハダの内皮を乾燥したものをオウバクと言います。オウバク（黄蘗・黄柏）はベルベリンなどのアルカロイドを含んでおり、強い抗菌性・抗生作用を有します。オウバクから作る「百草」は秩父大滝生まれの普寛上人が木曾の御嶽山を開山したとき村人へ製法を伝授したのが起源と言われています。

大変苦く、奈良の寺では長いお経である「陀羅尼助」を唱える時に口にくわえて眠気覚ましとしても用いられました。

黄蘗色（きはだいろ）ともよばれる鮮やかな黄色染料として、飛鳥時代から用いられ、中国で服色として地位の高い黄色にオウバクを用いられました、また和紙にオウバクの黄色をそめ、虫除けとしても用いられました。

